※ ホームページ等で公表します。（様式１）
立教ＳＦＲ－個人－報告

立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
個人研究
２０１４年度研究成果報告書

	所属部局･職	氏　名
研究代表者	社会学部　現代文化学科　助教	三田　知実　印
研究課題	高級衣料製造のグローバルな拠点――倉敷市児島の事例研究――	
研究期間	２０１４　年度	
研究経費	（支出金額）　1,000,000 円　／（採択金額）1,000,000　円	

研究の概要（２００～３００字で記入、図・グラフは使用しないこと）

近年の都市社会学では、知識生産が都市成長の原動力となるという認識のもと、先進国諸都市を事例とした文化生産研究が行われてきた。しかし先行研究は、文化生産者のデジタルスキルやデザインスキルに着目してきた。それゆえ都市文化生産研究において、製造という観点から考察を深めてこなかったという研究課題がある。この研究課題を克服するために本研究は、衣料文化生産を国内地方製造業都市の観点から調査してきた。

調査の過程では、児島の保有する資源と歴史的経緯をもとに、児島のもつ強みと弱点を見出した。またほかの都市の法人との取引に言及しながら、学生服製造拠点からデニム素材をもとにした、高級衣料製造のグローバルな拠点へとシフトできた児島の変容過程を明らかにできた。

衣料産業のグローバルな再編は、高級衣料のデザインと製造をめぐるグローバルな都市間分業を促した。このグローバルな都市間分業が、先進国諸都市の流行を支えていることが調査から明らかにできた。そのなかで、昔からの技術とあらたしいデザインの技法と駆使しながら、高級衣料製造のグローバルな拠点機能として再成長してきた都市のひとつとして、本研究は、児島を位置づけることができた。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔高級衣料製造のグローバルな拠点〕〔製造をめぐる法人間ネットワーク〕〔衣料産業における都市間分業〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

研究の背景

1970 年代以降のグローバル経済の進行は、先進国諸都市の経済を衰退に向かわせた。そのため「何が都市の成長を促すのか？」という現実的な問いが、近年の都市社会学にたいし求められている。今のところこの問いにたいし、「知識生産が都市成長を促す」という答えを、都市社会学はみいだしている（Sassen, 2001）。

この認識をもとに、ニューヨーク、ミラノや東京を事例とした衣料文化生産の研究が、都市社会学でも活発になりはじめている（Bovone, 2005; Lloyd, 2006; 三田, 2012; 2013）。日本の都市社会学では、東京都渋谷区神宮前の住宅街であった細街路が、高級衣料デザインのグローバルな研究開発拠点へと変容した過程を明らかにしたケーススタディがある（三田, 2012; 2013）。この研究では、その要因を 1980 年代のグローバル経済の進行と、それに伴う土地資産バブルの盛衰に求めている。そのうえで、都市成長の原動力としての衣料文化生産に重要な要素を、衣料デザイナーのグローバルなネットワークであることを明らかにした（三田, 2012; 2013）。

これら先行研究の考え方は、古典的都市社会学が追求してきた研究の問いとは対照的なものである。なぜなら、1970 年代までの都市社会学は、「都市の成長が何を生み出すのか？」という問いにたいする答えを追求してきたからである。とくに近年の都市文化生産研究は、現代アートや衣料デザインといった、知識生産に焦点をあてた調査研究がなされてきた。そのため、財の製造という観点から衣料文化生産に深く言及していないという研究課題が残されている。とくに衣料文化生産は、デザイン部門と製造部門の取引と流通網の発達により成立している。それゆえ、製造の観点から文化生産を捉え、それを既存の都市文化生産研究と結び付けることが必要不可欠となる。

1980 年代の日本の社会学においても、衣料製造業都市の研究が、学生服製造として有名な、倉敷市児島を事例としておこなわれてきた（布施, 1985; 西尾, 1985; 浅野, 1985）。また、日本の地理学や経営学でも、1980 年代に学生服のへの需要が落ち込み、カジュアル高級衣料製造にシフトしてきた児島の再成長を、産業集積論の観点から明らかにされてきた（猪口・小宮, 2007 ; 立見, 2004; 藤井・戸前・山本・井上, 2007; 坂倉・河口・宮崎・原田, 2008）。

布施、西尾や浅野による先行研究は、幕藩体制期の干拓事業を契機とした綿花栽培から軍服・学生服・制服の生産拠点へと変化してきた過程が詳細に記述されている。とくに児島の衣料製造部門が中堅企業から零細企業と工縫層（家庭内手工業）により支えられていることが明らかにされた（布施, 1985; 西尾, 1985; 浅野, 1985）。日本の地理学や経営学では、マイケル・ポーターの「産業クラスター」（Porter, 1990=1992）の枠組みで児島を捉え、児島の産業集積にかんする説明がなされている（坂倉・河口・宮崎・原田, 2008）。また、ピオレとセーブルの『第二の産業分水嶺』（Piore and Sable, 1984=1993）に代表されるポスト・フォーディズム論の観点からも、児島の高級デニム製造拠点を、産業集積の成功事例として捉えた研究もある（立見, 2004; 藤井・戸前・山本・井上, 2007）。

じっさい近年の児島を代表とする瀬戸内海沿岸都市や、播磨灘沿岸都市（加古川・姫路・西脇）の小規模衣料製造部門は、国内外の大都市衣料デザイン部門と、グローバルなネットワークを形成し、取引を強化しながら発達してきた。このネットワーキングと取引の強化が、衣料産業のグローバルな再編を促し、デザインと製造をめぐるグローバルな都市間分業体制を形成してきた。

しかし上述の社会学、地理学、経営学における先行研究においては、衣料産業のグローバルな再編と、グローバル都市特有の知識生産と関連付けながら、高級衣料製造業都市を捉えきれていない。グローバリゼーションの観点から製造業都市の空間再編を捉えることの重要性は、海外の研究者によっても提唱されはじめている（Flew, 2013）。

とりわけ、高級衣料のデザインと製造をめぐる都市間分業を捉えることは、近年の都市社会学のメインテーマのひとつであるグローバル都市と、国内外の製造業都市のあいだの密接な関係性を示すことができるという現代都市社会学研究としての学術的意義がある。

（次頁に続く）

研究成果の概要（つづき）

そこで本研究は、国内地方都市における高級衣料製造のグローバルな拠点機能が、どのように発達してきたのか？この問いを明らかにするため、国内高級デニム衣料製造が活発な、倉敷市児島の記述をおこなう。そのうえで、事例記述を、都市社会学の枠組みで考察を深めた。

調査方法

主な調査対象者は、児島に事業所をおく製造職人、デザイナー（東京出身）そして児島商工会議所の総務課長である。また児島商工会議所、倉敷市発行の資料と、児島商工会議所、倉敷ファッションセンター、倉敷市や、JR 西日本が発行している児島にかんする広報資料、および倉敷市統計書を収集し、記述のための参考資料として利用した。

また児島の事業所との取引状況と衣料産業のグローバルな動向を把握するため、2014 年 12 月末から 2015 年 1 月上旬にかけて、アムステルダムとパリに渡航し、調査をおこなった。具体的には、まずアムステルダムの新都心 Zuid（ザイト）で衣料デザイナーからハウスオブデニムと児島の関係にかんする聞き取り調査を実施した。サンプリングの方法は、筆者の友人である、東京南青山のアシスタントデザイナーの紹介にもとづくものである。パリの現地調査では、パリ 12 区を拠点とするデザイナーを対象とした聞きとり調査を行った。調査倫理の遵守、および調査対象者の個人情報管理を徹底した。また調査対象者の経済活動に支障をきたさないように、情報管理を徹底した。調査結果の公表にかんしては、調査対象者からの承認を得ている。

調査結果の概要

児島は、幕藩体制における綿花栽培から一貫して繊維業に特化しつづけてきた。それが要因となり、戦前は軍服、戦後は学生服、そして 1990 年代以降は、デニム製の高級衣料製造のグローバルな拠点へと転換してきた。近年では、国内外の高級衣料デザイン部門と活発な取引をおこなってきた。また国内外のデザイナーとの相互作用が頻繁に行われてきた。こうして児島の事業所は、グローバルな純粋生産志向のニーズにこたえられる、最先端のデザインにも対応できるカジュアル高級衣料製造を可能にした。

幕藩体制の時期においては、高梁川の土砂と交易船が捨てたニシンのくずが生み出した、肥沃な海域を埋め立てた。この肥沃な土壌が、良質な塩田開拓を促した。塩田のあと、厚手で高級な綿花栽培を促した。その後児島では足袋製造が発達したものの、第一次世界大戦後、朝鮮半島や中国などアジア近隣諸国による足袋製造業の発達により衰退した。戦後は、戦時中の軍服製造技術を応用し、学生服の製造拠点へと変容した。とくに 1962 年の全総にもとづく水島の臨海工業地帯開発により、合成化学繊維の開発が促された。児島は、合繊メーカーの系列企業集積地帯となり、学生服の国内製造拠点となった。その後生産過剰と学生服需要の落ち込みにより、児島の地域衰退を招いた。しかし過去の縫製技術を応用したデニム素材のカジュアル高級衣料製造を成功させた小規模事業所が、国内外の高級衣料デザイン部門との取引を活発化させた。

また児島の事業所が、国内外の大都市衣料デザイン部門とのグローバルな法人間取引を可能にした。その要因は、綿花栽培農家、製糸工場、紡績工場、染色工場、加工組み立て工場とデザイン事務所が参加する、素材国際展示会への児島の事業所が参加したことにある。この素材展示会をつうじ、衣料分野における製造（素材）をめぐるグローバルなネットワークが形成されていることが明らかになった。このグローバルな素材展示会開催のさい、児島のデニム素材を用いた高級衣料製造のスキルの高さにかんする情報が共有されはじめた。このことが契機となり、パリやニューヨークの高級衣料ブランド大資本が、児島の工場に衣料製造委託を行いはじめた。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い
場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

① 誌論文

三田知実, 2015,「高級衣料のグローバルな製造拠点――倉敷市児島における高級カジュアル衣料製造部門の事例研究――」日本都市社会学会年報第 33 号, 日本都市社会学会.（査読付論文として投稿。2015 年 5 月 6 日に掲載決定。9 月に公表）

②図書

現在のところ、後述の研究報告書を出版物としてリライトする予定である。そのため、継続調査を行い、研究のブラッシュアップを行う。問題はデータが膨大にあることである。論旨がぶれないよう、安定性の維持につとめる。

③シンポジウム・公開講演会等の開催

スケジュール調整が長引き、2015 年度に、調査対象者に還元するための公開講座を開催するよう、鋭意準備を進めている。なお④最下部に掲載のとおり、調査対象者への知財還元を行っているので、そちらを参照されたい。

④その他（学会発表・研究成果報告書）

■研究成果報告書

三田知実, 2015,「高級衣料製造のグローバルな拠点に関する都市社会学的研究」（研究代表者　三田知実　立教大学社会学部現代文化学科・助教）立教大学学術推進特別重点資金（立教 SFR）2014 年度　個人研究　研究成果報告書

■学会報告・研究会報告（1）

「衣服製造のグローバル都市・倉敷市児島
　―ジンメルからサッセンまでの都市社会学を基盤とした実証的研究―」
報告大会：2014 年度ジンメル研究会大会
開催機関：ジンメル研究会
開催場所：大学利用施設 UNITY（ユニティ）神戸市西区
発表日時： 2014 年 9 月 20 日 (土)　14:00
報告者氏名： 三田　知実
報告種別： 単独

■学会報告・研究会報告（2）

「衣料産業のグローバルな再編と都市間分業体制――東京青山・原宿エリアと倉敷市児島の比較研究――」
報告大会：「第 2 回創造産業の持続的発展に関する研究会」
開催機関：同志社大学創造経済研究センター
開催場所：同志社大学今出川キャンパス
発表日時： 2014 年 10 月 4 日 (土)　14:00
報告者氏名： 三田　知実
報告種別： 単独

■調査対象者への還元事業

児島ジーンズストリートに事業所を構える衣料製造職人への知財
（デザインおよびレーベルの企画立案に関するデータ）の提供
※東京青山の広告代理店のデザイン部門に勤務されている方、またライターとして都内企業にご勤務される方のご協力を経て、2014 年 12 月にデータ（動画・画像等）を提供。
※2014 年 10 月に、お二方のご協力を経て、3 名で児島に向かい、児島の製造職人の方と企画会議を行った。その会議を通じた知財として位置づけられる。